山辺町埋蔵文化財調査報告書　第1集

K-801

玉虫沼1号窯跡
発掘調査報告書

1989.3

山辺町教育委員会
玉虫沼窯跡群調査団

玉虫沼1号窯跡
発掘調査報告書

1989.3

山辺町教育委員会
玉虫沼窯跡群調査団

序

本報告書は、山辺町教育委員会が実施した「玉虫沼１号窯跡」の発掘調査をまとめたものであり、本遺跡は９世紀末～10世紀初期頃と考えられる遺跡です。

「県民の森」や自然休養村整備による各種レクリェーション施設がととのえられ、手近かな自然とのふれ合いの場を提供しているが、開発による土地の造成等によって世に知られなくなることから、玉虫沼窯跡について発掘調査を行い記録にとどめることにしたものです。

今回の調査は、須恵器を焼成した窯跡で半地下式無段窖窯で窯跡の状況等が明らになるとともに、村落に日常の什器である坏や貯蔵用の甕を供給したのであろうと偲ぶことができます。それらは、今後玉虫沼窯跡を解明していくための貴重な記録となることと思います。

また、本報告書が本町の郷土史研究の一助となり、さらに埋蔵文化財に対する一層の理解につながれば幸いに存じます。

最後に、この調査にご協力いただいた柏倉亮吉先生をはじめ報告書の執筆にあたられました川崎利夫先生、茨木光裕氏、発掘調査にご協力いただきました町文化財調査委員の高橋玄壽氏、後藤禮三氏、工藤一夫氏ほか関係の方々に対しまして心から感謝とお礼を申し上げます。

平成元年３月

山辺町教育委員会

教育長　蜂　谷　四　郎

例　言

1　本報告書は、山形県東村山郡山辺町大字大塚982ノ2、996に所在する玉虫沼窯跡群（遺跡番号383）１号窯の発掘調査報告書である。

2　玉虫沼窯跡群の発掘調査は、昭和54年度に下記の要項で実施した。

（１）　遺跡の名称　　玉虫沼古窯群（山形県遺跡番号383）

（２）　遺跡所在地　　東村山郡山辺町大字大塚982ノ2、996

（３）　土地所有者　　山辺町大字大塚　小関浅雄

（４）　調査面積　　600㎡

（５）　調査目的　　窯跡の確認調査

（６）　調査期間　　1979（昭和54年）　６月10日～24日

（７）　調査主体　　山辺町教育委員会

（８）　調査担当　　柏倉亮吉（山形県文化財保護審議委員）

高橋玄寿（山辺町文化財調査委員）

（９）　調査事務局　　山辺町教育委員会社会教育係

3　本報告書の作成は次の通りである。

・本文執筆　Ⅰ～Ⅳ　茨木光裕（日本考古学協会会員）

Ⅴ　川崎利夫（日本考古学協会会員）

・図版及び実測図　茨木光裕

・編集　　山辺町教育委員会社会教育係

・協力　　柏倉亮吉　高橋玄寿　後藤禮三　工藤一夫　佐藤継雄　庄司哲

・事務局　山辺町教育委員会社会教育係

4　本窯跡出土遺物及び写真原版、実測図原図は山辺町教育委員会において保管している。

目　次

Ⅰ　はじめに …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2

Ⅲ　窯跡の発掘 …… 5

（１）　１号窯跡 …… 6

（２）　土壙状遺構 …… 7

Ⅳ　出土遺物 …… 8

（１）　須恵器 …… 8

（２）　赤焼土器 …… 9

（３）　その他の遺物 …… 9

（４）　出土遺物の検討 …… 9

（５）　１号窯跡の時期について …… 14

（６）　出土遺物からみた玉虫沼窯跡の様相 …… 15

Ⅴ　むすび …… 17

挿図目次

第１図　窯跡群位置図 …… 3

第２図　窯跡群付近地形図 …… 5

第３図　１号窯跡（SQI）平面図・断面図 …… 6

第４図　窯跡出土遺物実測図（１） …… 10

第５図　窯跡出土遺物実測図（２） …… 11

第６図　窯跡出土遺物実測図（３） …… 12

第７図　出土遺物実測図（別地点） …… 13

図版目次

図版１　調査状況 …… 19
　　現地説明会風景 …… 19
図版２　１号窯跡全景 …… 20
図版３　１号窯跡出土遺物（１） …… 21
図版４　１号窯跡出土遺物（２） …… 22
図版５　１号窯跡出土遺物（３） …… 23

Ⅰ　はじめに

山形県内で、須恵器・瓦等を焼成した古代の窯業遺跡は、約60地点あまりが知られている。その分布をみると、山形盆地では、天童市東部の丘陵山麓部や上山市西部から山形市南西部にかけての丘陵一帯、あるいは寒河江市郊外の平野山周辺などに、特に集中して認められる。これらは、原料となる良質の陶土や水の便、燃料の供給などの諸条件を満足するような適地に群在して点在する。これらの小支群が、地域的にまとまって分布し、山形盆地では、盆地縁辺部の山麓付近に立地するものが多い。しかし、山形市三本木窯跡のように、標高約540mの高所に立地するものもある。玉虫沼窯跡も、後述するように、白鷹丘陵を登った丘陵頂端部に立地し、標高は約500mを測り、山形県内に所在する窯跡でも、山形市三本木窯跡と同様、最高所に位置する。

玉虫沼窯跡については、以前より畑などの耕作によって多くの遺物が採取されており、窯跡群として周知の遺跡であった。山形盆地の西縁部を画する白鷹丘陵一帯は、比較的なだらかな丘陵が連なり、山形盆地の平野部に広がる市街地域の後背部として、各種開発が予想される地域でもある。山辺町畑谷から玉虫沼付近にかけては、「県民の森」や、各種レクリエーション施設が設置され、手近かな自然とのふれ合いの場を提供している。「人間と緑」のかかわりを考えるとき、当該地域が、さらに重要な位置を占めるものと考えられ、玉虫沼窯跡についても、より明確な様相の把握が必要であると考えられた。

山辺町文化財調査委員会では、昭和51年４月、これまで大量に採取されていた須恵器等の遺物について、出土地点の確認や出土状況の把握のための現地調査を実施した。山辺町教育委員会では、調査委員会の基礎調査の報告を受けて、昭和54年６月10日からの約２週間にわたり発掘調査を実施した。調査は、柏倉亮吉氏（山形大学名誉教授・山形県文化財審議委員）の指導を受け、山辺町文化財調査委員、および地元の中地区有志の協力を得た。

調査は、遺物の散布が認められた玉虫沼北岸の北東面の斜面一帯について、４地点にトレンチを設定して行ない、１地点より、半地下式窖窯一基を検出した。各地点に設定したトレンチからは遺構は検出できなかったが、多量の遺物が出土し、比較的広範囲に須恵器片の散布が認められることから、大規模な窯業生産地を形成していたものと考えられ、今後の遺跡保存および活用のための資料を得ることができた。

II　遺跡の立地と環境

玉虫沼窯跡群は、東村山郡山辺町大字大塚982、他に所在する。山形盆地の西縁を区画する白鷹丘陵上の標高450mの高原に立地している。(第１図)

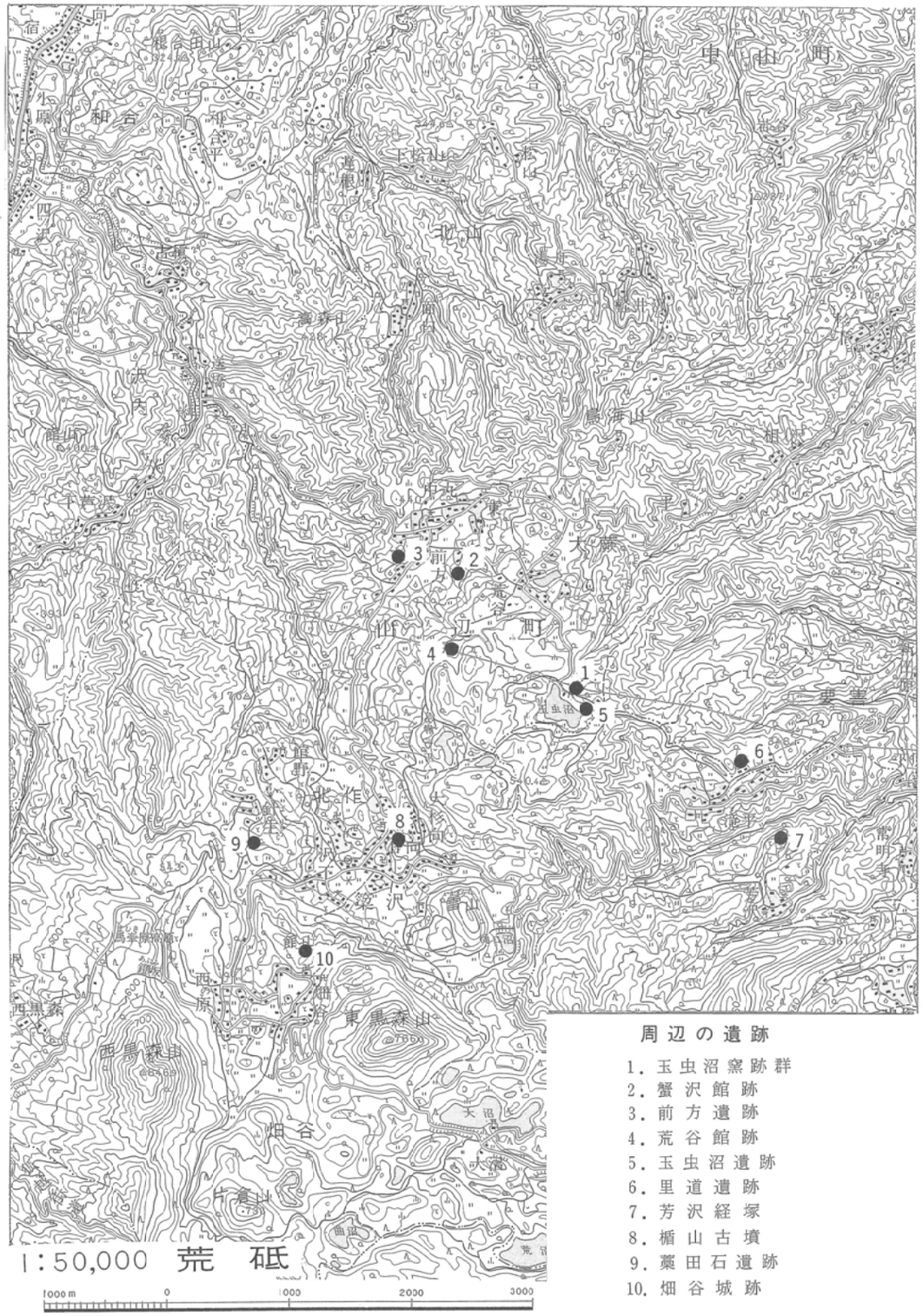
この地域は、白鷹丘陵の北半域を占め、標高200～500m内外の比較的ゆるやかな起伏に富む地形となっている。白鷹山（標高986m）は、第三紀層の凝灰岩・頁岩を覆って噴出した火山で、高森山、西黒森山、東黒森山へと連なる稜線は外輪山の一部を形成するものと考えられている。この白鷹火山のカルデラ内及び周辺には泥流が堆積し、白鷹山西北方の小針生、摂待付近には熔岩流による台地が発達している。白鷹山の北麓には、畑谷大沼、荒沼、玉虫沼などの小湖沼群が点在しているが、これらの湖沼群は、白鷹火山の噴出した泥流によって形成された堰き止め湖であり、後世、灌漑用に造成されたものである。この丘陵から流下する河川は、奥羽山系にみられるような大きな河川はなく、遅沢川、富神川、後明沢川などの小河川が東流し、須川左岸に合流している。

玉虫沼窯跡群が立地する白鷹丘陵は、また多くの遺跡が分布する地域でもある。縄文時代の遺跡としては、丘陵から流下する小河川にそった台地上や、丘陵を登りきった山辺町畑谷や大蕨付近に多く分布し、白鷹山北方の泥流台地上に、藁田石遺跡、嶽原遺跡など、縄文時代中期前葉～中葉を代表する大規模な遺跡が認められている。また、藁田石遺跡からは弥生時代、古墳時代にわたる遺物も採取されており、比較的長期にわたる集落跡と考えられる。また、山形市滝の平に所在する里道遺跡からは、有孔円版等の祭祀遺物も出土している。

山辺町大字北作字楯山には、舌状に張り出した台地の先端部に径15m程度の円墳があり、箱式石棺一基が発見されている。これは、いわゆる終末期の古墳と考えられるが、この地域にも古墳を造成し得る小豪族層が存在していたことを示している。一方、『三代実録』にみえる定額寺の瑜伽寺については、白鷹丘陵の山形市滝の平が凝定地の一つとされている。

瑜伽寺は、貞観８年に定額寺に列せられたが、その所在の明確化については今後の課題である。玉虫沼窯跡の付近の能中地区に、礎石状の石材が散見されるという指摘もあり、白鷹丘陵の山間部も、かつては天台・真言を中心とした仏教文化の定着した地域でもあった。特に、山形市谷柏山から寒河江市平塩にかけての丘陵山麓部には点々と経塚が認められ、山形市芳沢からは、珠洲焼系の外容器が出土している。

また、村山地方と置賜を結ぶ狐越街道などの主要ルートもこの丘陵を横断しており、戦国期、最上氏の前哨線としての城館跡が多く残っており、畑谷城、蟹沢館跡、荒谷館跡などが点在している。

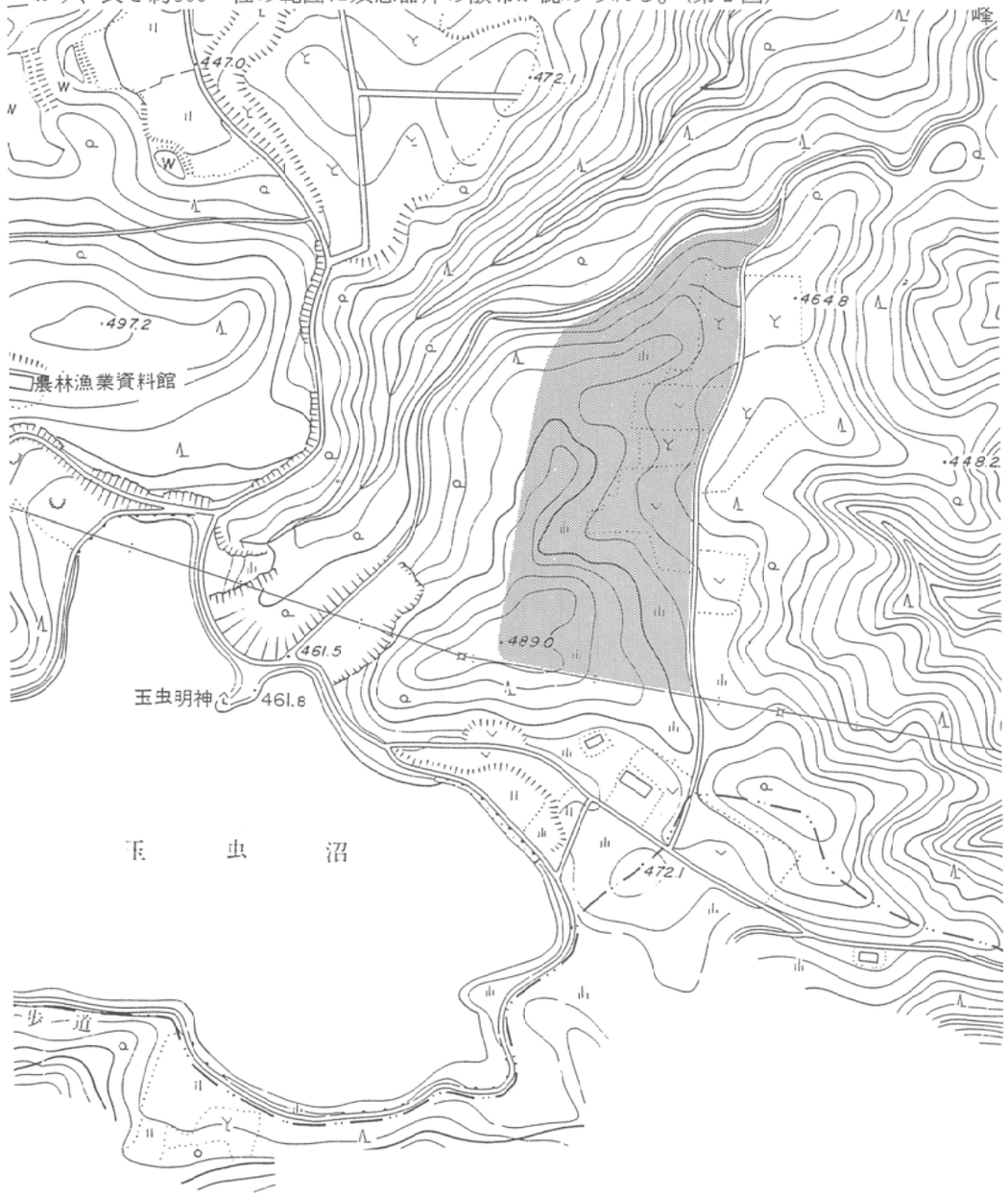


第１図　窯跡群位置図

山形盆地の須川西岸地域は、早くから農耕文化の定着した地域であり、菅沢２号墳、大之越古墳、坊主窪１号墳などがある。また山麓部の丘陵には、箱式石棺を内部主体とする終末期の群集墳が密集している。平野部には、４世紀から10世紀頃までの集落跡が多く分布し、中山町柳沢から山辺町西部および山形市西部にかけての地域には条里制地割が広範囲に認められた。これらの背後を占める白鷹丘陵一帯は、古代の農業生産をささえる後背地としての位置をしめてきた地域でもあり、玉虫沼窯跡群も、そのような歴史的環境のなかに位置付けられると考えられる。

Ⅲ　窯跡の発掘

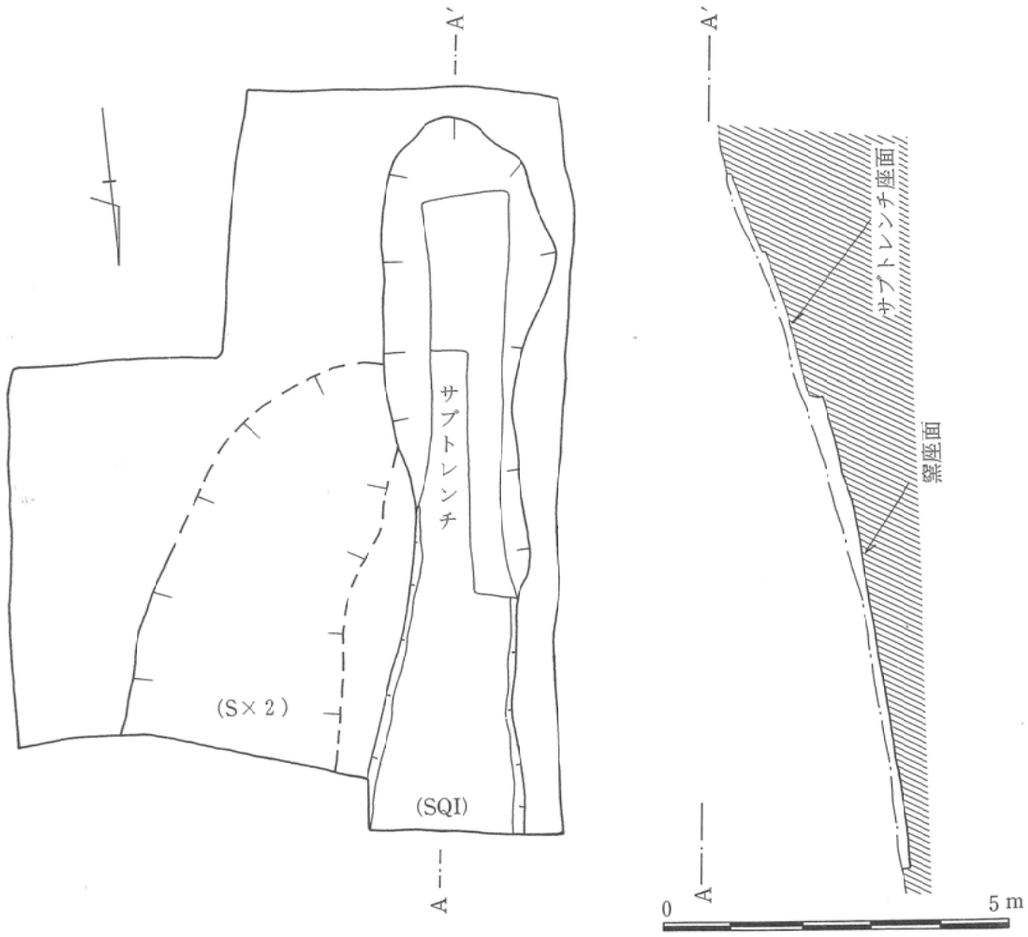
玉虫沼窯跡は、前述したように、玉虫沼の北東岸にのびる低平な丘陵の背後、北西面の斜面一帯にあり、小鶴沢川の谷頭斜面に立地する。付近は、比較的緩やかな斜面となっており、長さ約300m程の範囲に須恵器片の散布が認められる。（第２図）



第２図　窯跡群付近地形図

付近一帯は、ゆるい傾斜面を利用した畑になっており、丘陵部は雑木林である。調査は畑と丘陵部との傾斜変換線付近にトレンチを４カ所設定して行った。窯跡群があると考えられる丘陵斜面は、ほぼ東西にのびる、ゆるい弧状を呈し、今回、窯跡が検出された調査区は、この丘陵の東端部に位置している。西端部の調査区からは、遺構は検出されなかったが、酸化炎焼成による赤焼土器が多く出土した。中央部、２カ所の調査区では、比較的急斜面となっており、出土遺物も僅少である。

(1)　**１号窯跡**（SQI）（第３図）



第３図　１号　窯跡（SQI）平面図・断面図

１号窯跡は、前述したように、丘陵東端部の調査区において検出された窯跡である。南から北方へ広がる緩斜面に立地し、北側に焚口部をもつ半地下式窖窯である。主軸長10.1m、燃焼部幅1.9m、焼成部幅1.8～2.3mを測り、主軸をＮ３°Ｗにもつ。平面プランは、焼成部中央で最大幅を測る胴張りの形態を呈し、焼成部と燃焼部を区別するような特別の施設は認められないが、幅1.5mと、ややせまくなる。窯跡の平面プランの確認後、調査期間などの制約もあり、窯本体内部の主軸線上にサブトレンチを設定し、精査を行った。また、焼成部中央付近に深掘区を設け、床面の検出を行った。

その結果、燃焼部では、窯底の勾配11°を測り、焼成部は、完掘したわけではないのでその全様については不明であるが、約23°を測る。燃焼部から焼成部への移行点付近に、窯底床面の傾斜変換点を認めることができる。燃焼部では、比較的ゆるやかな勾配を呈するが、焼成部で急激に傾斜を増して窯尻へと移行しており、平面プランも焼成部中央で膨らむ形態を呈する。これは、熱効率を効果的に利用するための窯構造を反映しているものと考えられる。側壁部は、スサ入りの粘土を貼り付けており、天井部は崩落しているが、天井部断面がアーチ状を呈する半地下式窖窯である。

遺物は、焼成部の深掘区および、燃焼部のサブトレンチ内より検出されたが、大部分が須恵器である。玉虫沼窯跡群からは、酸化炎焼成の赤褐色を呈する「赤焼土器」が比較的多く採取されているが、１号窯跡では、両者の共存は認められない。

(2)　**土壙状遺構**（S× 2 ）

１号窯跡に隣接して、その東側に、長隋円形を呈する落ち込みが確認された。調査区内の確認面での大きさは、長さ約5.8m、幅約2.6mを測る。東壁部は明確に平面プランを追求できたが、全体プランについては不明確であり、隣接する１号窯跡（SQI）との切り合いが考えられるが、明確ではない。土壙状遺構の底面は、比較的平坦で、須恵器とともに、赤焼土器が多く認められた。その性格については、何らかの焼成遺構か、土器留め状の土壙とも考えられるが、調査が部分的であり、明確にし難い。

Ⅳ　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、須恵器・赤焼土器・土製品（土錘）などである。調査終了時から相当の年月を経ているため、各遺物の出土地点の帰属については明確にし難いところがある。ただ、調査時の所見によれば、１号窯跡（SQI）の出土遺物は、大部分が須恵器であり、赤焼土器等は別の調査地点より出土したものであるということであった。

各遺物の概要について各種別ごとに述べることにする。

⑴　須恵器（第４図、第５図11、12、第６図）

須恵器は、その大部分が１号窯跡（SQI）および隣接する土壙状遺構（S×２）の覆土より出土したものである。器種としては、坏、高台坏、甕、長頸壺などがあるが、蓋と考えられる破片は認められない。

坏では、技法上の相異により２類に細分することができる。

坏Ⅰ類（第４図１～３）

底部の切り離しが回転ヘラ切りによる一群である。底部の破片数の総計47点のうち、坏Ⅰ類は24点を数える。これは個体数ではないが約半数を占める。第４図１は口径13.4cm、底径6.5cm、器高4.2cmを測り、底部から直線的に立上り、口縁部でやや外反する。第４図２、３においても底径6.5cm前後におさまり、ほぼ同じ形態を呈する。

坏Ⅱ類（第４図４～10、第５図11、12）

回転糸切り無調整の坏で、底部破片総数47点のうち23点を数え、坏Ⅰ類との構成比率は、ほぼ同率である。形態的には、底部から直線的か、やや内湾ぎみに立上り、そのまま口縁部となるものと、やや外反するものとがある。底部中央がやや上げ底状を呈するものも認められる。法量的には、口径では、12.5～14.2cmの分布範囲をとるが、14.0cm前後に集中する。底径では、5.2cm前後、器高では、3.5～4.1cmの分布範囲をとり、3.8cm前後に集中する。

高台坏（第５図15）では、回転糸切り無調整の坏Ⅱ類に、外傾する低い高台が付くもので、高台坏ではすべて底部の切り離しは、回転糸切りの一群で占められる。

甕には、器壁が比較的うすい小形のもの（第６図25）と大型のもの（第６図27）の２種類がある。甕の破片は比較的多く出土しているが細片のため、その器形全体を把握できるものはない。概して小型の甕は焼成が良好であるが大形のものは淡青灰色を呈し、焼成はあまり良くない。第６図27では巻上げ痕を明瞭に認めることができる。器壁外面に斜位の平行状叩き目があり内面には、青海波文、および円形状のアテ痕が認められる。

壺は、長頸の比較的大口径のものと、長頸の小形壺の破片が出土している。第６図23で

は、推定径約15cmで、やや外傾する頸部をもち、肩部に浅い一条の筋が認められる。

⑵　赤焼土器（第５図13、14、16、17～22）

技法的には、須恵器と同じであるが、酸化炎焼成による赤褐色を呈する一群の土器で、器形としては、坏、高台坏、長胴甕などがある。

坏では、底部の切り離しは回転糸切りで、体部は直線的に立上り、口縁部でやや外反するもの（第５図13）もある。口径13.5cm、底径６cm前後で、器高4.5～5.0cmの範囲に分布し、須恵器坏Ⅰ・Ⅱ類と比較して、器高が高い傾向にある。高台坏では、低い高台が直立するものと、やや外傾する高台が付くものとがある。

甕は、ロクロ整形によるもので、口縁部は〝くの字〟状に大きく屈曲し、胴部は長胴形を呈するものと考えられる。第５図21、22は、底部破片と思われる。切り離しは回転糸切りで、小形の長胴甕と考えられる。

⑶　その他の遺物

今回の調査では、供膳及び貯蔵形態としての各種遺物のほかに、窯跡で焼成されたと考えられる土錘一点が出土している。第６図28は、長径9.4cm、短径3.9cmを測り、長軸方向に径1.2cmの孔が縦貫する。暗青灰色を呈する。

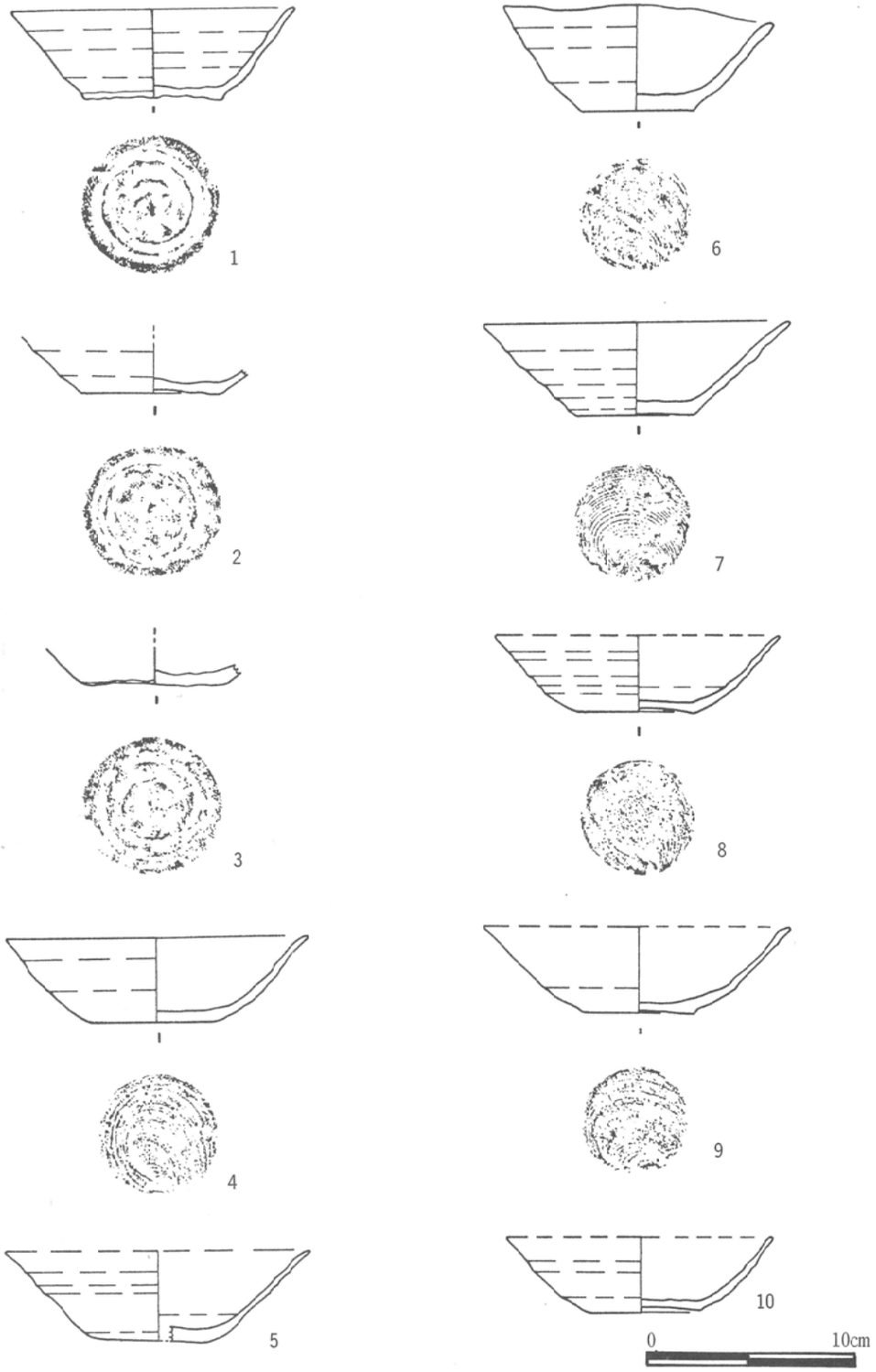
また、第６図24は、推定径25.5cmを測り、煮沸形態としての堝と考えられる。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、内面に煤の付着が認められ、ヘラミガキを行っている。

⑷　出土遺物の検討

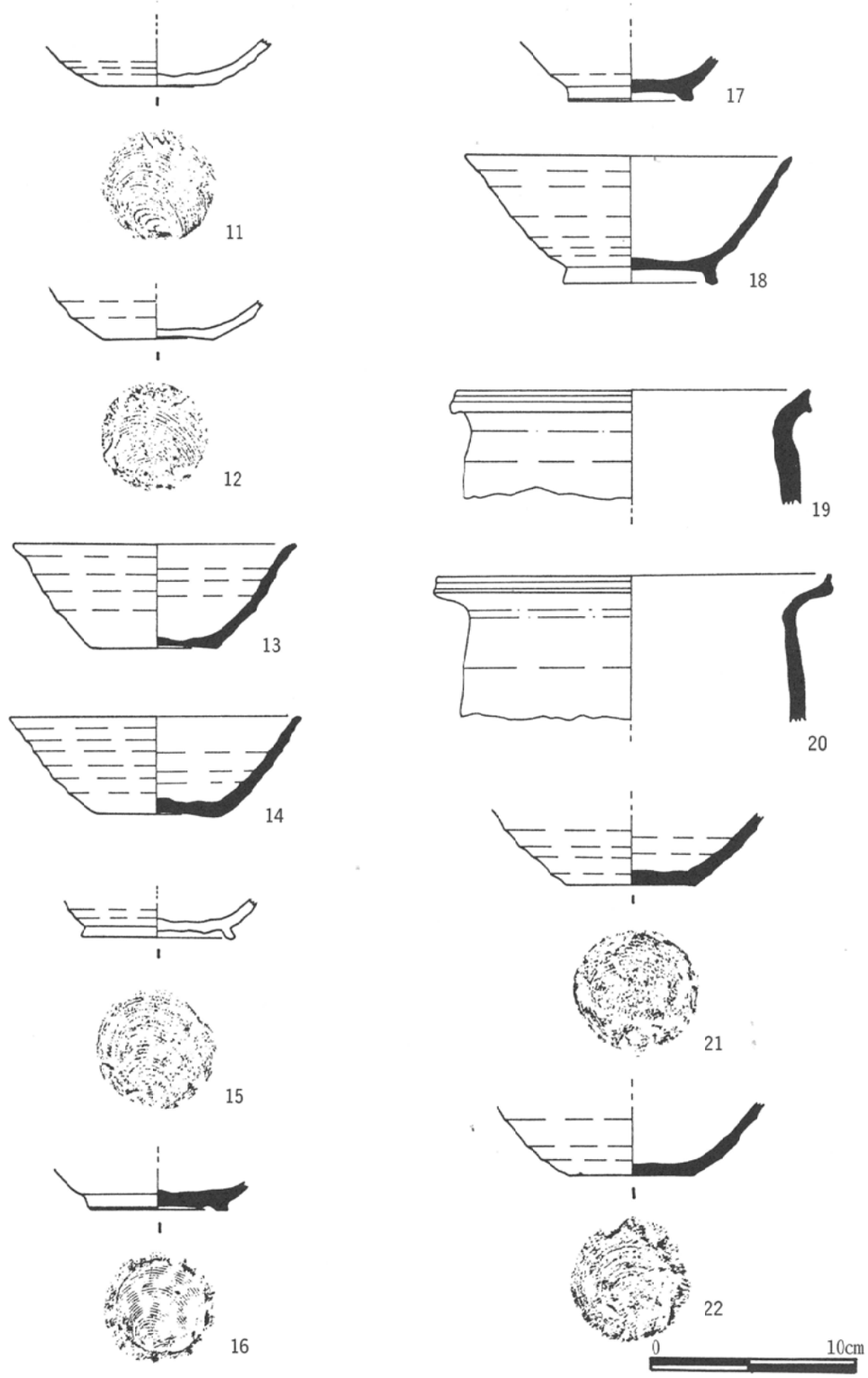
今回の調査では、前述したように１号窯跡を完掘していないので、焼成部床面の一括資料をとりあつかうことができず、資料的制約はまぬがれないが、須恵器については、１号窯跡の土器様相の一半を反映しているものと考えられる。

坏については、その技法上の違いから２類に細分した。両者の構成比は、底部破片の状況をみる限りにおいては、それぞれ約半数を占める。出土状況において両者を区別する根拠は認められず、共伴しているものと把握される。

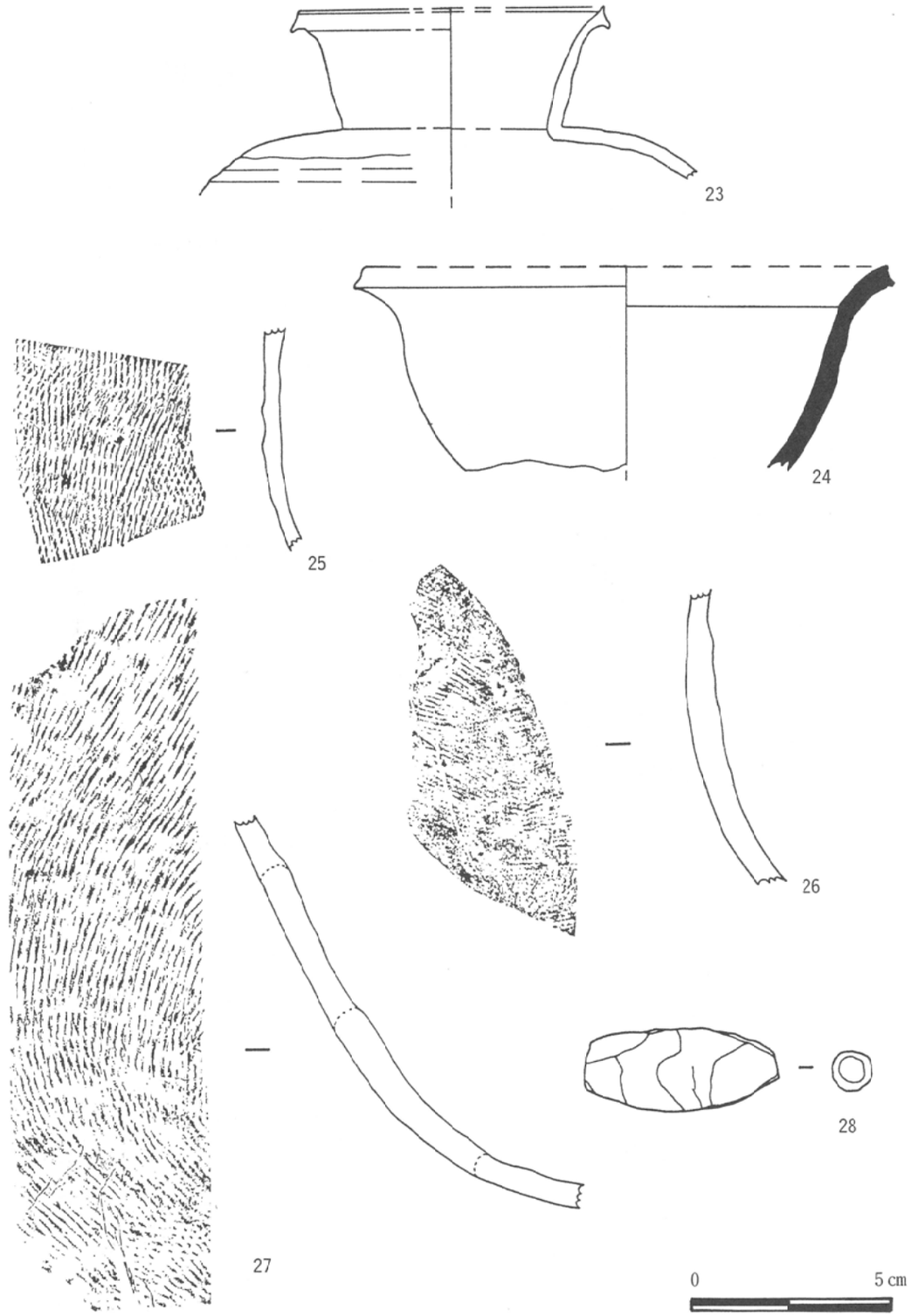
山形盆地の須恵器生産については、寒河江市平野山窯跡群の調査を契機とし、上山市久保手窯跡、同三千刈窯跡群、天童市二子沢窯跡群などの調査が行なわれ、その様相の一端が明らかになりつつある。それらの成果をふまえれば、回転ヘラ切り無調整の坏群に後出するものとして、回転糸切り無調整の坏群があることが認められる。法量上の検討については、口径・底径・器高などに一定のまとまりが認められ、それは、製品としての規格性を意図したことの反映であろうと理解される。玉虫沼１号窯跡の須恵器坏では、口径14.0cm底径5.2cm、器高3.8cm前後に集中する。坏Ⅰ類では底径においてやや大きい値をとる傾



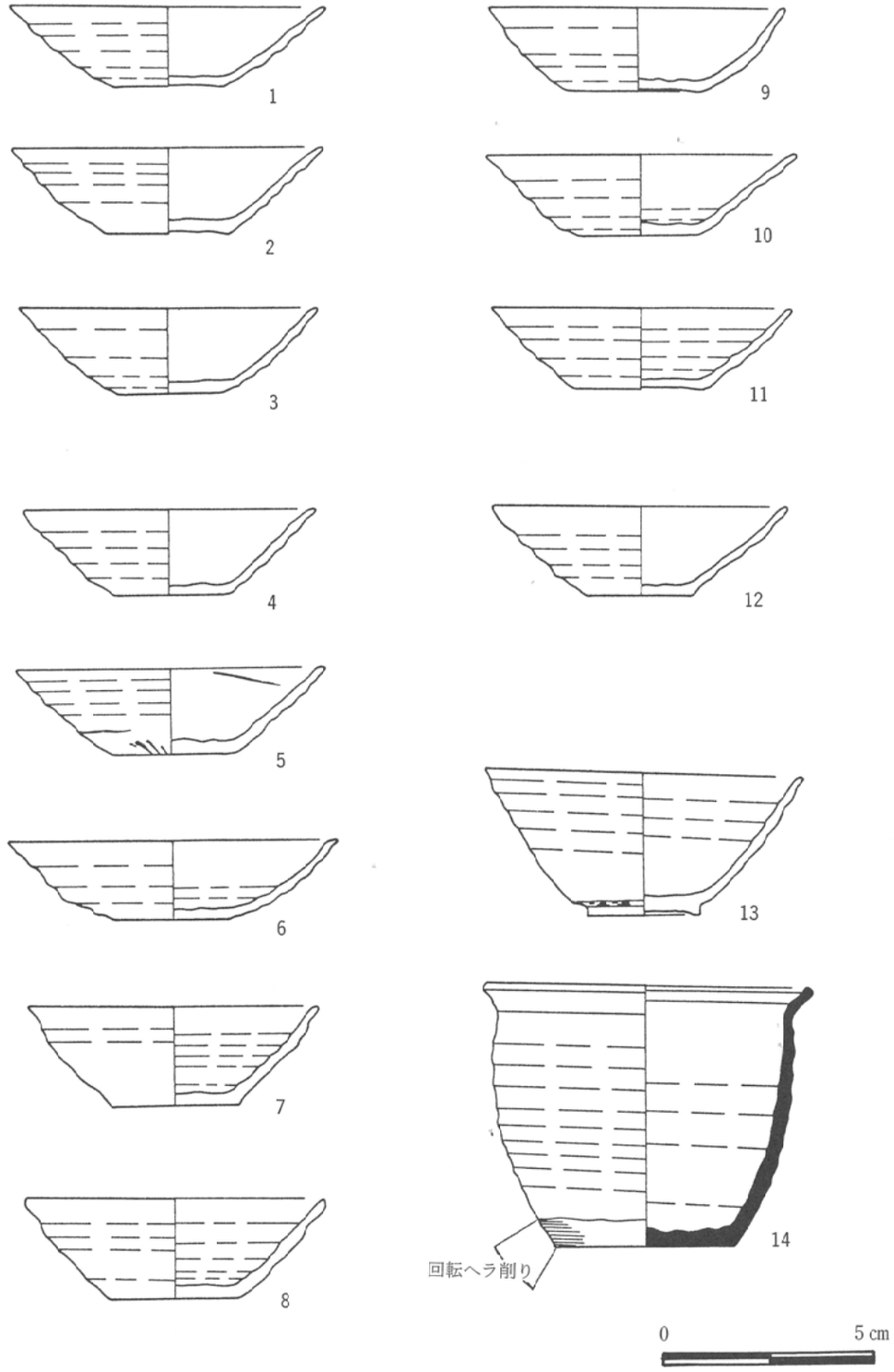
第 4 図　窯跡出土遺物実測図(1)



第 5 図　窯跡出土遺物実測図(2)



第 6 図　窯跡出土遺物実測図(3)



第 7 図　出土遺物実測図（別地点）

向にある。第７図は、以前に、当窯跡群の別地点より採取されたものであるが、底部の切り離しは、すべて回転糸切りであり、再調整等は認められない。法量的には、若干のバラツキはあるものの、１号窯跡とほぼ同様の分布傾向を示している。

山形盆地に所在する窯跡群と、今次調査において出土した玉虫沼窯跡の出土遺物について比較してみることにする。

(a)　小松原１号窯跡

上山西部および山形南西部丘陵に群在する窯跡群の一支群である。１号窯跡出土須恵器の器種としては、坏と蓋がある。坏では、底部の切り離しは、すべて回転ヘラ切りで、無調整のものと底部からの立上りが不明瞭な丸底風を呈するものがある。法量的には口径14.2cm底径7.5cm、器高3.2cm付近に集中する分布傾向を示す。

(b)　平野山第14地点窯跡

寒河江市西方の山麓部の平野山一帯に分布する窯跡群である。昭和58年の調査で第14地点の調査で２基の窯跡が検出された。１号窯跡では、坏・高台坏・埦・蓋などの器種が認められる。坏では、底部の切り離しがすべて、回転糸切りの一群で占められ、無調整である。各法量の平均値は口径13.64cm、器高3.35cm、底径6.78cmである。２号窯跡では、各法量とも若干大きい値をとる。

(c)　二子沢D・E地点窯跡

天童市東部の丘陵山麓部に群在する窯跡群で、D･E地点より各１基の窯跡が調査されている。両窯跡から出土した坏は、すべて回転糸切り無調整のものである。D地点１号窯跡出土の坏では、各法量の計測値が、口径13.7cm、底径6.2cm付近に集中する正規分布を示し、器高では3.2cm付近に最大値をもち、器高が高くなるに従って、個体数が減少する傾向にある。

以上の各窯跡出土の須恵器について、坏形土器の法量的な面から比較すると、口径においては、各窯跡とほぼ同様の分布傾向を示すが、底径では、前述した窯跡より小さく、器高では、やや高い値の分布傾向を示している。玉虫沼１号窯跡出土の須恵器・坏類では、形態的にも極めて類似し、法量的特徴として、口径14.0cm、底径5.2cm、器高3.8cm付近に集中するようである。別地点より採取されている坏群についても、ほぼ同様の法量的分布を示しており、同窯群群で生産された坏類の一般的傾向として把握できるものと考えられる。

(5)　１号窯跡の時期について

今回の調査で検出された１号窯跡について、出土した遺物の特徴等から、その操業時期について考えてみることにする。

山形盆地の須恵器生産の様相については、今後の調査例の集積と検討によって、より明確になってくるであろうが、これまでの調査成果をふまえれば、その開始期は、８世紀後半以降と考えられる。坏形土器についてみれば、回転糸切りで、手持ヘラ削り等の再調整を伴なう葉山３号窯跡、三千刈窯跡群、久保手１号窯跡などが当該期に位置付けられると考えられる。それら一群の窯跡に後出する時期のものとして、小松原１号窯跡など回転ヘラ切り無調整の坏を出土する一群がある。さらに、須恵器生産の拡大とともに、窯跡は山形盆地の縁辺部全域に認められ、大規模な窯業生産地を形成し、回転糸切り無調整の坏を出土し、段階的に展開していったものと考えられる。

玉虫沼１号窯跡では、回転ヘラ切り無調整のⅠ類および回転糸切り無調整のⅡ類が認められる。両者の構成比は、前述したように約半数を占める。Ⅰ類ではⅡ類より底径が大きい傾向にある。

山形県川西町道伝遺跡の調査成果によれば、SDIの寛平８年（896年）の年紀銘木簡に伴出した須恵器坏は、すべて回転糸切り無調整のものである。一方、秋田県払田柵跡で嘉祥２年（849年）の年紀銘木簡に共伴している須恵器坏は、ヘラ切り無調整のものであることが確認されている。当然、生産にかかわる技術伝幡の問題や、地域的交流の違いによる様相の差異などは考えられるが、出羽国という巨視的な前提に立脚すれば、９世紀後葉～10世紀初頭を一つの画期として、回転ヘラ切りから回転糸切りへの技術的移行が行なわれたと理解できる。

秋田県内の須恵器窯跡の検討によれば、９世紀後葉段階までは、両者の占める割合に変化はあるものの、回転ヘラ切り無調整の坏が存在することが指摘されている。今回の調査で検出された玉虫沼１号窯跡では、前述した坏Ⅰ類およびⅡ類が並焼されていると考えられ、一応、９世紀後葉後半～10世紀初頭頃の時期を想定しておきたい。寒河江市平野山第14地点１・２号窯跡では、坏はすべて回転糸切りによって切り離されているが、蓋頂部に回転ヘラ切り痕を認めるものがある。当該時期にはヘラ切り技法が存続しており、工人の違いによる器種上の技術的選択の違いとして把握したい。

(6)　出土遺物からみた玉虫沼窯跡の様相

１号窯跡の出土遺物の検討から、その操業時期を、９世紀後葉後半～10世紀初頭頃と考えられる。別地点から出土した須恵器をみても、ほぼ同様の形態的・法量的特徴を有することから、近接した時期が考えられ、付近一帯に地点を変えながら、窯が構築され須恵器生産が行なわれたものと考えられる。さらに、底部に回転糸切り痕をもつ、赤褐色を呈する酸化炎焼成の土器群が多く出土している。赤焼土器については、秋田県払田柵跡第７次調査のSK60より嘉祥２年の年紀銘木簡に、手持ヘラ削りの再調整を伴なう赤焼土器坏が出

土しており、山形県庄内地方の平形遺跡D地点では、須恵器・回転ヘラ切り無調整の坏と伴出している。8世紀末～9世紀前半には、供膳形態の器種として、赤焼土器坏の存在が認められ、10世紀前半を中心として集落跡では赤焼土器のしめる割合が増加する傾向にある。

今回の調査では、遺構との関連で、その出土状況を把握できなかったが、今後の調査によって、その生産にかかわる様相が明らかになる可能性がある。さらに、内面にヘラ磨きを施した塝が出土しているが、これは、内面に煤が付着し、使用された形跡があり、付近の今後の調査によっては、窯本体の検出のみならず、工房的施設や工人の住居等、須恵器・赤焼土器生産の全体像にせまることも可能であると考えられる。

主要参考

［文献］

①柏倉亮吉・伊藤忍「平野山古窯跡群一山形県における古代窯業遺跡の研究一」寒河江市教育委員会　1970

②寒河江市教育委員会「平野山窯跡第14地点発掘調査報告書」寒河江市埋文報第3集　1984

③上山市教育委員会「上山市久保手窯跡発掘調査報告書」上山市埋文報第3集　1983

④山形県教育委員会「三本木窯跡発掘調査報告書」山形県埋文報第59集　1982

⑤岩見誠夫・船木義勝「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」『秋大史学』第32号　1985

⑥秋田県教育委員会「払田柵跡一昭和50年度発掘調査概報」　1976

⑦川西町教育委員会「道伝遺跡発掘調査報告書」川西町埋文報第2集　1981

⑧佐藤庄一「山形県における平安時代の土器様相（予察）」『庄内考古学第16号』　1979

⑨山形県教育委員会「平形遺跡・周辺遺跡発掘調査報告書」山形県埋文報第26集 1980

V　むすび

諸般の事情により、発掘実施後10年以上経過している上、直接当時調査にたずさわらなかった者が報告書を執筆することとなったため、不備な点が多いものと思われる。

本遺跡は、須恵器を焼成した窯跡である。半地下式無段窖窯で、長さ10.1m、幅2m前後を測る。比較的大型の窖窯（あながま）である。窯の内部及び灰原（はいばら）から出土した遺物には次のような特徴がある。

1　須恵器の坏（つき）を主体とし、他に大型の壺や甕などもみられる。

2　坏は、底部のろくろからの切り離しがヘラ切りと糸切りが相半ばする。

3　甕は、表面平行条線文、裏面青海波（せいかいは）文及び同心円文が施される。

4　土錘が出土している。

5　赤焼（あかやき）土器は窯内から出土していない。

以上の特徴や窯体が大型であることから考えて、時期は前述の通り9世紀末及び至10世紀初頭の年代が推定されるであろう。それは平安時代前半期に相当する。この時期は、山形盆地においても、須恵器の生産が最高潮にむかう時であった。

別地点からも、須恵器が多量に出土しており、赤焼土器なども認められるところからみると、本窯跡のみでなく数基以上の窯の存在が想定される。またこれに従事した工人たちの居住地や工房跡、粘土採取地なども附近にあった筈である。玉虫沼は、宝徳3年（1451年）に築かれた県内最古の人工湖といわれているが、それ以前から湖水をなしていたことは漁に用いられた土錘が出土していることからうかがわれ、また湖の水を窯業生産に使用したことからも推定されるところである。美しい玉虫姫の伝説の地玉虫沼は、白鷹山カルデラが形成した湖として古代から存在したのであった。

玉虫沼周辺は、古代末から荘園として知られている「大曽根荘」と「山辺荘」の境界に位置する。また貞観8年（866年）に、出羽国の定額寺（じょうがくじ）（朝廷から勅額を下賜され、国分寺につぐ寺格をもつ古代寺院）となった「瑜伽寺（ゆかじ）」は、この近くの山形市滝の平か玉虫沼周辺にあったものと想定される。山形市鮨洗宝積院（すしあらいほうじゃくいん）に現存する重要文化財の十一面観音立像は、平安前期の作で、もとは瑜伽寺にあったものといわれる。

瑜伽寺がおおいに栄えたころ、この古窯跡群が操業していたことになり、寺院との関連も充分に考えられるのである。また山麓には条里制による水田と集落跡が数多く分布するが、それらの村落に日常の什器である坏や貯蔵用の甕を供給したのも本窯跡群からであろう。

本調査は、玉虫沼窯跡群の実態を明らかにする契機とはなったが、まだその全容は必ず

しも把握されたわけではない。窯業生産の実態はもとより、その供給地まで明らかにし、古代窯業生産のすがたを明らかにする課題が残されているといえるだろう。

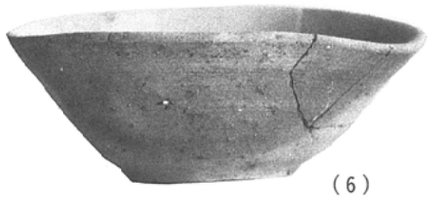
図版 1

調査状況

現地説明会風景

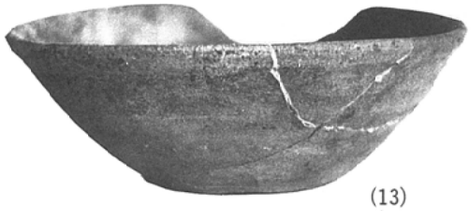
1 号窯跡全景

(5)



(6)

(14)



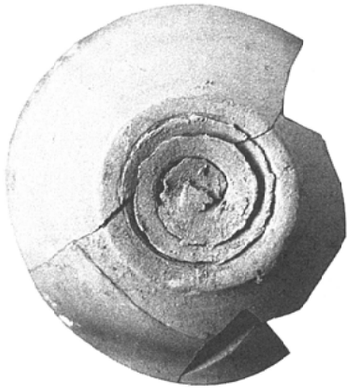
(13)

(4)

(1)

(18)

(7)



(1)

(2)

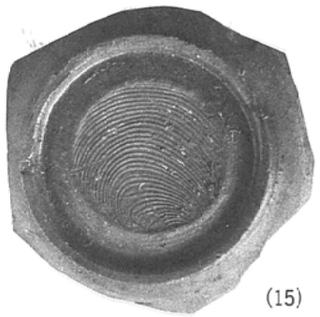
(3)

1 号窯跡出土遺物(1)

(14)

(4)

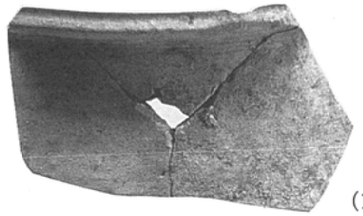
(7)



(15)

(16)

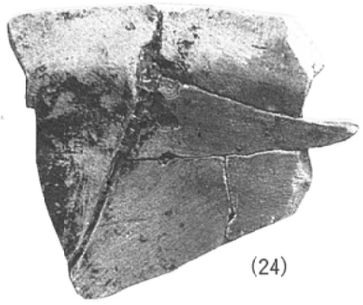
(17)



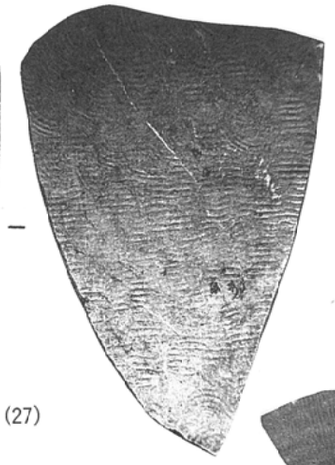
(19)

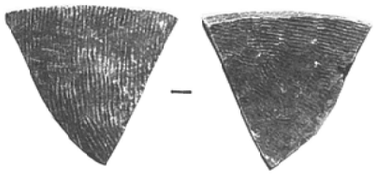
(20)

1 号窯跡出土遺物(2)

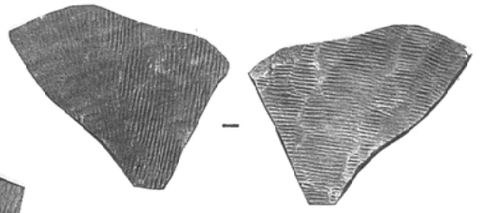


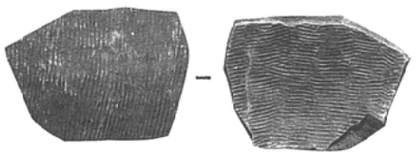
(24)





(27)





(28)

1 号窯跡出土遺物(3)

山辺町埋蔵文化財調査報告書第１集

玉虫沼1号窯跡
発掘調査報告書

平成元年３月25日　印刷
平成元年３月31日　発行

発行　山形県東村山郡山辺町大字山辺1
　　山辺町教育委員会
印刷　藤庄印刷株式会社